

【論文】

撥音終止オノマトペに関する考察

吉 永 尚

1. はじめに

オノマトペの語形パターンと意味の関連については、最近の先行研究でたびたび指摘されており、「ドン」「カクン」など「ン」(撥音)で終止するオノマトペは、一般的に終結と余韻を表わすと指摘されている。しかし、語彙の性質や習得についての詳細な研究は未だ少ないのが現状である。

本稿では、形態と意味の相関について、語末が撥音、長音、促音のオノマトペを用いた例文のそれぞれの文法性をアンケート調査により比較対照し、さらに現代日本語書き言葉均衡コーパスによりオノマトペのコロケーションについて検証を行う。

一般的にオノマトペは教育的側面で難易度が高いとされているが、検証で得られた語彙特徴を踏まえた効率的指導の有効性について提言したい。

2. 考察対象とするオノマトペ

本稿では、以下に示す2種の型に当てはまるオノマトペを主な考察対象とする。

①語基が一モーラの場合：X ン型 (ボン、バン、しゅん、きゅん、しゃん)

②語基が二モーラの場合：XY ン型 (バタン、コツン、ポトン、だらん、しょぼん)

「X ーン型」(バーン、ガーン)、「XY ーン型」(コツーン、だらーん)、機械音などを表わす「X イーン型」(ウィーン、ブイーン)、反復継続を表わす「X ン X ン型」(トントン、ガンガン)、「XY ン XY ン型」(チャボンチャボン、ぷるんぷるん) などについては、①②のバリエーションとみなし、基本的な①②について考察する¹⁾。

一般的に、撥音で終止するオノマトペは語末に「と」を伴い副詞的要素として表れ、動作や状況の様子を補足説明する文法的機能を持つ。

「と」の解釈について、小野(2007)では「じっと」「ちゃんと」など以外、「と」の付かない形を基本形としており、「と」の有無による相違についての言及は特にない。「すかっとする」のように「っ」で終わるものの音声補助的役割を担うものと「きりきりとと痛む」のような任意的なものがあるが、いずれも本質的な意味用法には関与しないと考える。従って、本稿では「と」の有無は文法的相違に波及する問題ではないと判断する。

また、「ボタンーボタン」「ゴツンーゴツン」などの清濁音の相違による語感の違いについても多くの先行研究で指摘されており、濁音は一般的に大きく、重いものが主体である場合の事態の変化や終結、余韻を表す²⁾。

撥音で終止するオノマトベには、副詞用法の他に強制的に単独で用いられる用法、複合語要素となる用法など多様な用法が見られる。以下に例を挙げる。

- a. 単独で用いられる用法：ショボン、ガーン、キョトン、キラン（間投詞や漫画の吹き出し）
- b. 複合語要素となる用法：壁ドン、胸キュン、ボン菓子

3. 撥音終止タイプのオノマトベの意味特徴

小野（2007）、浜野（2014）では、語末が撥音のオノマトベは動作や状況が終結し、その結果が余韻を残しているとしているが、この意味特徴は撥音「ん」の音声の性質と関連していると思われる。また、オノマトベの音声と意味の関与について、長音を含むものは継続を含意し、促音を含むものは瞬間的变化を表すことは、多くの先行研究で既に述べられているが、撥音を含むオノマトベの音声と意味の関与についての研究は管見では比較的少ない³⁾。

先行研究で論じられているオノマトベの音声と意味の相関の多くは研究者自身の内省に基づく。本研究では、日本語母語話者対象の語感アンケート調査、BCCWJによるコロケーションデータ分析により、音声と意味の相関について客観的に検証する。

3.1 音声と意味の相関についての検証

前節で述べたように、一般的に語末が撥音のオノマトベは動作や状況が終結し、その結果が余韻を残していることを表わすとされ、副詞用法では変化結果や余韻を含意する述語と呼応する。従って、変化結果を含意する文では、事態の継続を表わす長音終止タイプは表れにくいことが予測され、瞬間的变化を表わす促音終止タイプでは結果の余韻を含意する文では座りが悪いことが予測される。

また、撥音終止タイプのオノマトベは、変化結果を含意する文に選択されやすく、動作や状況が一定の継続を意味する文には表れにくいことも予想される。

本節では、これらの音声と意味の関係性について、日本語母語話者を対象とするアンケート調査、BCCWJでのコロケーションデータ分析を用いて検証する。

3.1.1 日本語母語話者を対象とする語感アンケート調査

変化結果文でのオノマトベ語末音の違いによる文法性の相違を、日本語母語話者を対象に、①②の型でそれぞれ3つの例文について語感アンケートを行い、調査した。

語末が撥音で終止するタイプ、長音で終止するタイプ、促音で終止するタイプのオノマトベの語末音の違いによる文法性の相違を比較するため、同一の変化結果文でオノマトベのみを置き換

えた文について、OK（自然）、?（やや不自然）、??（かなり不自然）の3段階で文法的な容認度を直感的に判断し文頭に上記の記号を書き込み、さらに各タイプの語感の違いを自由記述で書いて貰った。（原則として、OKを記入するのは一つの文のみとした。）被験者（日本語母語話者）の内訳は、大学生50名、社会人（公開講座受講者）50名である。

①②のオノマトペ文で最も回答数の多かった記号を文頭に示し、集計結果を表1、2に示す。

①Xン型

- (1) OK 風で部屋のドアがバンと閉まった。（撥音）
- (2) ? 風で部屋のドアがバツと閉まった。（促音）
- (3) ?? 風で部屋のドアがバーと閉まった。（長音）

表1 ①Xン型のアンケート結果（OKの回答の多い順・（ ）内は全体に対する比率（%））

オノマトペ	終止音	OK	?	??
バン	撥音	93 (93)	7 (7)	0 (0)
バツ	促音	7 (7)	93 (93)	0 (0)
バー	長音	0 (0)	0 (0)	100 (100)

「閉まる」という瞬間的な変化結果を示す事態では（1）は自然であるのに対し、長音で継続的事態を表す（3）ではかなり不自然であると判断した人が圧倒的に多い。

瞬間的事態を表わす（2）では容認性は（3）よりは上がるが、やや不自然と判断した人が多い。

（2）はドアが閉まる様子が瞬間であることのみを表わし、変化結果までは含意していないためと思われる。

②XYン型

- (4) OK 壁に立てかけてあった額縁がバタンと倒れてしまった。（撥音）
- (5) ? 壁に立てかけてあった額縁がバタツと倒れてしまった。（促音）
- (6) ?? 壁に立てかけてあった額縁がバターと倒れてしまった。（長音）

表2 ②XYン型のアンケート結果（OKの回答の多い順・（ ）内は全体に対する比率（%））

オノマトペ	終止音	OK	?	??
バタン	撥音	76 (76)	24 (24)	0 (0)
バタツ	促音	24 (24)	76 (76)	0 (0)
バター	長音	0 (0)	2 (2)	98 (98)

「倒れる」という瞬間的な変化結果事態では、（4）は自然と判断した人が多いのに対し、長音終止タイプの（6）は大多数の人がかなり不自然であると判断した。促音により瞬間的事態を表

わす (5) では OK と判断した人は①の促音終止タイプ (2) の例文と比べて比較的多かったが、やはり、やや不自然であると判断した人の方が多い。多くの人が自然と判断した (4) と (5) の相違については、(5) では瞬時的事態を中心に表わし変化結果の含意が少ないのに対し、(4) では倒れたときの音の反響や変化結果の余韻まで表しているため、より自然と判断したためと思われる。つまり、語末が促音で終止するタイプは瞬間性を主に表し、撥音終止タイプとは異なった反響や余韻を表す点で、撥音終止タイプと異なる。

また、自由記述では、「バタン」は大きく重いものが倒れた場合に、「バタッ」は比較的軽いものが倒れた場合に用いるので、音の響きが違うという記述が多く見られた。

大きく重いものが倒れた場合の方が音の反響が大きいため、撥音終止のオノマトペが選択されるのであろう。

(6) のような長音終止タイプでは継続的事態を表すため終結を表しにくく、「閉まる」「倒れる」のような瞬時的な結果残存を含意する事態とは折り合いが悪いので、かなり不自然と答えた人が圧倒的に多いと思われる。

また、②「XY ン型」に促音が挿入された「X ッ Y ン型」(ゴックン、ポッチャン、カックン、ポットン、どっきん) についても動作や状況の終結や結果の残存を表わしていると思われる。しかし、この型では第一モーラの後に「っ」が挿入されて一区切りを表わしているため、動作や状況の終結に一定の心理的停顿がある事を強調していると思われる点で、全同ではない⁴⁾。

3.1.2 BCCWJ によるコロケーション分析

前述のように、副詞用法の撥音終止タイプのオノマトペは、変化結果を含意する文に選択されやすく、動作や状況が一定の継続を意味する文には表れにくいことが予想される。

BCCWJ-NT (現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版、国立国語研究所編) により「バタン (と)」(副詞用法) と述語動詞のコロケーションデータを分析した結果、上述の語彙的性質を検証する偏りが見られた。「バタン (と)」を含む文字列を検索した結果、64 件が該当したが、56 件が「閉める」「閉まる」「倒れる」など瞬時的な変化結果を表わす動詞述語文であった。

以下、例文を挙げる。

- ・たちまち自動車のトランクに吸い込まれ、トランクのふたがバタンと閉まったのです。(モモ、ミヒヤエル・エンデ (著) / 大島 かおり (訳))
- ・ドアが、バタンと閉まり、スヴェンは出ていった。(外人部隊、ダグラス・ボイド (著) / 伊達 奎 (訳))
- ・強風が吹いているときに開けると、強風にあおられて一気にバタンと閉まる危険があることだ。(一流建築家の知恵袋マンションの価値 107、碓井 民朗 (著))
- ・駅の階段が降りられず、バタンと倒れたことが数回あった。(あさま山荘銃撃戦の深層、大泉 康雄 (著))
- ・丸ぼちゃポリスが乱暴にバタンと窓をしめた。丸ぼちゃはどうも気が立っているらしい。(ほ

いほい旅団ベトナムへ行く、志摩 千歳 (著))

・自分の部屋の階まで上がった途端、エレベーター前のドアがバタンと閉められ、ガチッと施錠されてしまい、・・・(白夜の風に漂う、残間 昭彦 (著))

・バタンと閉じたドアに向かって、わたしは思い切り、スリッパを投げつけた。(合鍵の森、末永 直海 (著))

・しもべ妖精を締め出し、バタンと扉を閉めながら、シリウスがイライラと言った。(ハリリー・ポッターと不死鳥の騎士団、J・K・ローリング (著)／松岡 佑子 (訳))

・ハッチをバタンと閉め、船尾のcockピットへと走る。猫と鼠だ。(アルバトロスの血、リドリー・ピアスン (著)／菊地 よしみ (訳))

・メールボックスの蓋が全部、バタンと手前へ倒れる仕組みになっているんです。」(京都奥嵯峨柚子の里殺人事件、和久 峻三 (著))

また、「バタン」が瞬間的な変化結果ではなく、具体的な音を表していると思われる例も少数見られた。

・廊下でいくつかの扉がバタンバタンと鳴り、足音と声が出た。(半熟マルカ魔剣修行!、デイリア・マーシャル・ターナー (著)／井辻 朱美 (訳))

・昨夜、帰宅するとバルコニーの方でバタンバタンと異様な音がする。すわ、泥棒かと思ったら、蟬が窓ガラスに・・・(Yahoo! ブログ)

「コッソ」 「ポトン」の副詞用法についても同様に調べた結果、やはり瞬間的な変化結果を表わす述語動詞と呼応することが多いことがわかった。

「コッソ (と)」: 23 件全て「ぶつかる」「当てる」「打つ」「殴る」などの位置変化動詞

「ポトン (と)」: 11 件全て「落とす」「落ちる」「入る」「入れる」などの位置変化動詞

3.2 この節のまとめ

日本語母語話者を対象とするアンケート、BCCWJでのコロケーションデータ分析により、語末が撥音のオノマトペは動作や状況の終結、その結果の余韻を表わすことが実例から検証された。変化結果や結果の余韻を含意する文では、事態の継続を表わす長音終止タイプ、瞬間的な変化のみを表わす促音終止タイプでは文法的な容認度が低い。

また、撥音終止タイプのオノマトペは、変化結果を含意する文に選択されることが多いことがわかった。

4. 効率的な指導への提言

オノマトペの指導は日本語教育において一般的に難易度が高い分野とされているが、使用頻度の高いオノマトペの効率的な教育の必要性が最近注目されて来ている。

終止音によるタイプ分類、及びそれぞれの意味特徴の導入は、音形から意味を推測できる点で

一定の効果が期待でき、日本語教育への貢献が見込まれる⁵⁾。

オノマトベの形態と意味の関与については、多くの用例を対象とした詳細な調査が必要であるが、終止音によるタイプ分類やそれぞれの意味特徴の導入は、オノマトベの理解の手がかりとなり効率的指導に繋がる可能性が高いことを提言したい。

5. 今後の課題

オノマトベの形態と意味の関与については、慎重な調査研究が必要である。「バタン」のような擬音語だけでなく、「ドキン」「ズキン」のような擬態語についても同様の意味特徴が適応されるかなど、多くの用例を対象とした詳細な検証を課題としたい。撥音終止タイプのオノマトベの形態と意味の相関関係は促音、長音など他の音声タイプにも適用されると思われる。

オノマトベの形態によって意味や機能を推し量ることができるようになる事は、日本語学習において大きな手掛かりとなりうる。形態と意味機能の相関を精査し得られた知見を教育分野に生かしていくことが今後の課題である。

(本研究の一部は科研基盤研究 (C) : 19K00725 によるものです。)

注

- 1) 語型は浅野千鶴子 (編) (1978) 『オノマトベ辞典』、小野正弘 (編) (2007) 『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトベ辞典』などを参考にした。
- 2) 浜野 (2014)、田守 (1993)、小野 (2007) の記述を参考にした。
- 3) 浜野 (2014)、田守 (1993)、角岡 (2007)、小野 (2007) の記述を参考にした。
- 4) 小野 (2007) では「っ」「ん」「ー」相互の結びつき方について、「っ」が最も断ち切る力が強く、強制的に一時的な停顿を表わし、「ん」がそれに続き、「ー」は断ち切る力が最も弱いと分析している。
- 5) 台湾東海大学、開南大学の日本語中上級クラスの日本語学習者各 30 名を対象に、オノマトベの語末音による意味の違いを導入してからオノマトベの個々の意味を教えたクラスと導入せずに個々の意味だけ教えたクラスで、文意に合うオノマトベを選択させるテストを行った結果、意味の違いを導入したクラスの方で平均点が高かった。

参考文献

- Akita, Kimi (2009) *A grammar of sound-symbolic words in Japanese: Theoretical Approachs to iconic and Lexical Properties of Mimetics*. Ph.D. dissertation, Kobe University.
- Kakehi, Hisao, Ikuhiro Tamori, Lawrence Schourup (1996) *Dictionary of Iconic Expressions in Japanese*, 2 vols. Mouton de Gruyter.
- 浅野千鶴子 (編) (1978) 『オノマトベ辞典』角川書店.
- 小野正弘 (編) (2007) 『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトベ辞典』小学館.
- 影山太郎 (2005) 「擬態語動詞の語彙概念構造」第 2 回中日理論言語研究会発表要旨.
- 角岡賢一 (2007) 『日本語オノマトベ語彙における形態的・音韻的体系性について』くろしお出版.
- 杉村泰 (2017) 「日本語のオノマトベ「ヒリヒリ、ヒリッ、ヒリリ」、「ビリビリ、ビリッ、ビリリ」、「ピリピリ、ピリッ、ピリリ」の記述的研究」ことばの科学 31、111-130.
- 田守育啓 (1993) 「日本語オノマトベの統語範疇」笈壽雄・田守育啓編『オノマトピア擬音・擬態語の楽

園』、勁草書房.

浜野祥子 (2014) 『日本語のオノマトペ』 くろしお出版.

吉永尚 (2016) 「心身の状況を表す擬態語動詞についての素性分析」園田学園女子大学論文集 第 50 号、21-28.

吉永尚 (2016) 「感情・感覚を表す擬態語の語彙特性についての考察－擬態語動詞の観察を中心に－」日本言語学会第 153 回大会発表予稿集.

吉永尚 (2017) 「心身の状況を表す擬態語の習得についての考察－中国話話者の作文データをもとに－」園田学園女子大学論文集第 51 号、93-103.

吉永尚 (2019) 「オノマトペの語形パターンに関する一考察」園田学園女子大学論文集第 53 号、75-81.

使用したコーパス

BCCWJ-NT (現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版、国立国語研究所編)

[よしなが なお 日本語教育・日本語学]